2024 年度（春学期）
Griffith University（オーストラリア）

A.K.（社会システム学科・2 年次生）

Ⅰ．留学レポート

①留学を目指した理由

高校時代、計画していた留学がコロナ渦の影響で叶わなかった。しかし、海外経験を積みたいという思いが常にあった。将来は国際協力の分野に尽力するのが私の夢であり、そのために必要な語学力と国際力を得たいという目標があったからだ。大学時代には必ず留学をしたいという思いで入学。在学中に最も早く留学できる制度がセメスター語学留学であったこと、かつて私の英会話の先生がオーストラリア人だったため、最も親しみを感じる英語圏の国だったこと、日本との時差がないこと、動物や自然、文化などに強く関心があったこと。これらの理由からオーストラリアでの語学留学を決めた。

②留学決定から出発までの準備期間

留学前の日々の学習に関しては、CASE のコースを選択していたので、授業で出される多読の課題などを中心的にやっていた。他にも単語帳や文法テキストの復習など、それまでの学習方法の継続。そしてオンライン英会話も活用して、無理なく英語に触れる習慣を作っていった。ビザ申請に関しては万一のことも考え、エージェントの添削サポートを利用することにした。大学からの課題であった研究・学習計画書の作成や保険の申請など、長期にわたってやるべきことが多かった印象だ。日程に従ってしっかり着実に進めていくことが大切だと思う。これらは授業期間中に進めたことで、パッキングは春休みのうちに終えた。

③現地到着後

飛行機のトランジットは無理がないように時間に余裕を持たせた。ゴールドコーストの空港に到着後、迎えの車が空港に来ないというハプニングがあった。急いでエージェントの方に問い合わせ、ウーバーを手配してもらい、何とかホストファミリーの家に無事到着することが出来た。ホストファミリーと犬たちが温かく迎え入れてくれたのでとても安心した。オリエンテーションはオンライン・オフライン両方を用いて複数日にわたって行われたので、その間自室の整理整頓や日用品の買い出しなど、新生活に向けて必要な準備を進めることが出来た。在留届の提出や保険の確認、インターネット環境の設定など手続き等も行った。また、移動の疲れもあったので睡眠を良く取るようにした。

④語学研修機関

a. 施設・環境・スタッフ

語学学校の建物は Griffith College と同じ建物に入っていて、学内の橋を渡ったところに位置する。建物の入り口に立つと、イメージカラーの赤を基調とした壁、コアラのマスコットキャラクターの像が印象的だ。学内全体を通して設備は非常に充実していると思う。いつでもどこでも学習に集中できる環境が整っていて、個人的には図書館が特にお気に入りの場所だった。学校の帰りに友達と集合し、遅く

まで残って課題をするのに利用していた。いろいろな学生が集う場所なので、刺激を受けながらそこで勉強するのが楽しかった。また、キャンパス内には緑が多く、木々を窓から眺めながら勉強するのは気持ちが良かった。先生・スタッフの皆さんが非常に協力的であり、サポートデスクは利用しやすかった。総じて、勉強をするのにとても快適な環境だったといえる。

b. 授業内容、課題、試験

授業は基本的に PC しか使わない。Microsoft Teams 内にクラスがあり、そこで必要な授業教材が全て揃う。完全ペーパーレスな授業が新鮮だった。一日中パソコンとにらめっこなので、充電器やモバイルバッテリーが欠かせなかった。

トピックは週により異なるが、授業内容は一貫してクラス内でのディスカッションとエッセイの記述に重点が置かれていた。とにかく常に何か発言しなければならないので、意見を考え、言葉に表す習慣と、傾聴力が高まった。国籍も価値観も、多種多様なバックグラウンドを持つ人たちが集まる。グループでの活動は配慮と協調を持って、皆の意見を一つにしていく必要がありそのバランスが難しかったが、非常に学びがいのある経験だった。また、クラスメイトと一緒に解答を導き出していくスタイルなので、基本個人で黙々と勉強するような時間は確保されないこと、一方的な講義がほぼなく、先生はファシリテーター的存在であることが日本での学習スタイルと違い、これもまたとても新鮮だった。

課題は所属するクラス、先生によって大きく異なると思うが、次の授業に向け、そしてテストに向けてしっかり勉強することが必要だった。試験は毎ターム、最終週に数日間にわたって行われた。内容も所属クラスにより異なるが、 4 技能に分けて行われた。

⑤クラブ、課外活動、ボランティア活動

Griffith では掲示、Web サイト、SNS、様々な媒体でイベントの告知・募集をしているので、参加したいものに積極的に参加した。授業ではない場で気楽に英語を使えることや、世界中の友達が本当に沢山できるので、参加していて本当にとても楽しかった。Griffith での一番の思い出はこういったイベントやボランティア活動だ。マウントタンボリンへのハイキングや、他学生との会話イベントの Café Chat、コアラの保護区での植林ボランティア活動が特に思い出深い。学生に提供される機会が豊富なので、積極的に調べて活用したことで、学校生活が非常に充実したものになった。語学学校に限らず多くの学生と交友関係が広がり、常に新しい人たちとの出会いがあったのが刺激になった。学びへのモチベーションに繋がったと感じる。

⑥現地での住まいについて

ホームステイのご家庭には本当に恵まれた。オーストラリアの地で素敵な人たちと巡り合えたことに心から感謝している。オーストラリアで一番に落ち着く場所だったので、とても離れがたかった。私はニュージーランド出身のマザーとファーザー、犬二匹と暮らした。加えて留学生を受け入れるための部屋が

もう一つあり、5 か月過ごす間に二人と一緒に暮らした。二人とも同い年ですぐに打ち解けた。最初は日本人学生と一か月弱、次はアメリカ人学生と二か月近く過ごした。また私が入居する前から短期ステイしていた日本人のお姉さんも近くに住んでいて、よく家に遊びに来てくれた。最後の期間に一緒に住んでいたアメリカ人のルームメイトは、私にとって、何でも話せる友達であり家族のようなかけがえのない存在になった。帰国後、彼女は私に会いに日本に遊びに来てくれた。オーストラリアでの出会いを一生ずっと大切にしていきたい。

さらに、マザーとファーザーの友人、兄弟、孫、ひ孫まで、いつも誰かが訪ねて来ていて、温かく賑やかな空間だった。特に思い出深いのは、ファーザーの 80 歳を祝う誕生日パーティー。総勢 40 名もの参加者が集った。週末に、おじいちゃんおばあちゃんたちの輪に混ざって、お庭でのランチ会に私も何度か参加した。犬たちがいる生活ということもあって、とても平和で穏やかで幸せな日々の連続だった。沢山の思い出があり、今ではオーストラリアでの私の帰る場所、第二の家だと感じる。料理好きな二人はいつも手料理をふるまってくれ、オーストラリアやイギリスの伝統料理、多文化社会なだけあり中東やアジアなど各国のメニューの日もあったり、一緒にピザを焼いたりもした。特にファーザーの作る秘伝のマッシュポテトが私の大好物だった。綺麗好きなマザーのお陰で家はいつもきちんと片付いていて、インテリアも含め素敵な空間だった。日本人としては嬉しいのだが、浴室にバスタブもあった。

通学は徒歩 20 分、トラム 10 分という距離だったが、途中でカンガルーが出没する公園を通り、緑豊かな通学路でウォーキングをするのが癒しの時間だった。

⑦長期休暇の過ごし方

長期休暇はなかった。

II．留学の感想

① 留学中で楽しかったこと、最も思い出に残っていること

週末や学校の帰りは、海辺や遊園地、ショッピングやご飯に行った。いつでもビーチに行ってゆったりまったりできるのがゴールドコーストだ。特に何をするでもなく景色を眺めたり、コーヒーやアサイー片手にお喋りに耽ったり、丘の上に寝転んで音楽を聴いたり。

滞在最後の 3 週間は、思い出づくりにオーストラリア観光の計画を友人と立て、週末にウルル、メルボルン、シドニーを巡った。どこに行っても日本ほど混雑せず、広大な大自然のパノラマビューを独占し、開放的な気分で伸び伸びと過ごすことが出来るのがオーストラリアの素晴らしいところだ。

数えきれないほどの思い出があるが、特に思い出深いのは、友人たちと過ごせる最後の日に地元のナイトマーケットに皆が集合してくれて、お別れパーティーをしたこと。そして何より、ホストファミリー家に日本から私の両親が訪れて、一緒にディナーを食べたこと。最後に直接感謝を伝えることができて良かった。オーストラリアに来て沢山の素敵な出会いがあったことに感謝の気持ちでいっぱいになり、全ての楽しかった記憶が溢れ出してきた。目標を達成し、幸せな気持ちで締め括ることが出来た。人との関わり合いの中で成長させてもらえた留学だった。

② 留学中でつらかったこと、最も苦労したこと

体調を崩したこと。帰国の三週間前にコロナウイルスと食中毒に同時感染し、異国の地で自らをケアする事態になった。幸い休養と処方してもらった薬のお陰で回復することが出来たが、闘病は辛かった。漢方やサプリメント、常備薬に日本食と、不測の事態を考えていろいろと準備して持って行ったのが幸いして、大いに助かった。

気候についていくつか挙げる。オーストラリアの冬シーズンには、芯から冷える寒さを経験した。室内でも底冷えする。厚手のジャケットやマフラー、湯たんぽなどで防寒対策をした。暑い時期には様々なビッグサイズの虫たちが出現して驚く。オーストラリアではステロイドを処方できないので、軟膏など持って行く薬を確認しておくと良いと思う。個人的には、虫除けスプレーは日本製品の方が効果があったと思う。日差しは年中強くいためサングラスと、そして突然の雨が降ることも多いので折りたたみ傘、この二つは外出時に必ず持ち歩いていた。

ホームシックなどはなかったが、食の面で日本の味が恋しくなる時があった。恐らく最も苦労したことだ。日本食料理屋に行ってみたり、皆で焼きそばやお好み焼き、鍋などを作ってパーティーをする機会をもったりした。日本人コミュニティで過ごす時間も時には大切だ。試行錯誤しながら共に耐え忍ぶ仲間がいて心強かった。

③ 文化・習慣の違いなどで驚いたこと

何でも思ったこと、頭の中にあることは口に出して伝える文化。特にホストファミリーとの会話では、アクセントに耳が慣れていくまで時間がかかった。また考える間もなく口に出して考えを表明する習慣には当初驚いたが、これにも慣れていった。会話の量がコミュニケーションで最も要になる部分だと思う。慣れない非母国語での会話では、誤解や意味の取り違えは起こり得るものだが、とにかく会話量を意識して多くするようにすることが、互いへの理解をより深めたと感じる。失敗など考えずに、とにかく言葉を発する姿勢で楽しんだ。

現地で私が受け取っていた空気感としては、いろいろなバックグラウンドを持つ人たちが同じ土地に集まり、多様性の中に私も溶け込んでいって生活している感覚で、自由に感じられて開放的だったのが忘れられない。

着いてしまえば生活にすぐ馴染むことが出来た。ダイソーにスーパー、ドラッグストアと、生活必需品や食品系では、全く困らない程度の品揃えだったので生活しやすかった。

Ⅲ．留学希望者へのアドバイス

① 日本から持っていって、特に役に立ったもの

GELI での授業は Teams や OneNote を使用するのでパソコンは必須。補足として iPad などのタブレット端末があればより便利だと思う。

私のホームステイ先の家はいつも洗濯をしてくれていたので、洗濯ばさみやピンチ付きハンガーを持って行ったが使わなかった。オーストラリアの洗濯機はパワーが強く洋服が傷みやすいと聞いていたので、洗濯ネットを多めに持って行ったがこれが大活躍だった。

あとは日本食。レンジで作れるご飯パックとインスタントの味噌汁、麺類は留学中の大きな支えだっ

た。ホストファミリーは毎日美味しい手料理を準備してくれて、毎食とても楽しみだった。しかし、お肉とジャガイモワンプレートが基本。食習慣の差には、流石に胃腸が驚いてしまい、定期的な息抜きとしての日本食の摂取は欠かせなかった。レトルトのハヤシライスも荷物の隙間に入れていったが、これもまた良かった。配り土産と自分が食べる用のお菓子も持って行くと役立つ。

現地では基本何でも手に入るが、着いてすぐにお店に調達しに行くのは大変だろうと予想していたので、日用品はある程度使う分を、事前に準備して持って行くと楽だと思う。シャンプーなどかさばるものは現地で購入した。整腸剤や解熱剤などの基本的な常備薬については、英文証明書の発行がいる場合もあるので、早めの段階から用意しておくと良いと思う。
「これがないと生活に困る」という順にパッキングしていった。

② 語学力の向上等、留学の成果、留学前と後で変わったこと

英語を使うハードルがより下がり、いつでも脳を切り替えられるようになった。スコア上ではリスニングが一番伸びた。英語を使わないと毎日を暮らしていけないという、自分へのプレッシャーが必然的にある環境が、留学を経験する醍醐味だと思っていて、私はその環境にさらされる中で成長していけたと思う。主張していく姿勢を体得できたことで、今では英語で話すことがかなり快適だと実感している。特に大きな収穫は、留学先で世界各国の友達を作れたことだ。様々な文化を知ることや、英語を通して会話できることの喜びがモチベーションになっていた。オーストラリアで出会った友人は皆それぞれのビジョンを持ち、個性が光っている人たちばかりだった。彼らとの繋がりが出来たことが私にとっての最大の幸運だ。私も負けずに学んでいきたい。今後も学習を継続して、使う英語の精度と内容の密度を高め、より質の高い英語を使いこなしていきたい。

③ これから留学をしようと思っている後輩へのアドバイス

何事にも、是非とも挑戦してみて欲しい！一歩飛び込んでみればきっと何とかなる。反骨精神を昇華させて、チャレンジし続ける気持ちだけは忘れないで生きたいな、と私は思う。

良いことも、大変なことも、留学には本当にいろいろとある。これまで、こんなものを準備すると良いなどと散々書き尽くしたが、一人ひとり留学のかたちは違うので、皆さんのやりたいことをとにかく存分に経験してみたら良いと思う。ワクワクした気持ち、不安な気持ち、さまざまに入り混じると思うけれど、全ての日程を終えて日本に帰って来た時には、大いに成長した自分を発見すると思う。自分の知る世界を飛び出して外を知ることは、視野を広げてくれる貴重な経験になる。皆さんの頑張りと成長を応援したい！

Ⅳ．将来の目標

① 今後の進路、将来の目標・夢

国際協力の現場で、具体的には人道支援の現場で働きたいという強い思いは変わらない。この留学をひとつのきっかけにして、今後は自分の分野において専門的な知識と理解を深め、体得していきたい。次の目標として、協定留学制度を利用し専門性のある科目を英語で学ぶことを経験し、大学院、国際協力分野での実務経験と、ひとつひとつ段階を踏みながら着実に能力を高めていく。

Ⅴ．写真



朝焼けをバックに、ウルル（エアーズロック）とカタ・ジュタを同時に眺望できるポイントから。週末を使って行った。オーストラリアのスケールの大きさにはいつも驚かされる。「世界は私が知らないくらい大きいのだ、ああ、今私はこの大陸の中心に立っているのだな」と、自然の厳しさへの畏怖を感じるとともに、とても大きな感動を覚えた。鉄を含んだウルルのにおいや間近で見るその岩肌の粗さ、周辺に植生する背の低い変わった植物やウサギなどの動物たちなど、目にするものすべてが新鮮で、五感で感じることができた。



ウルルでの朝日の後は、風の谷・カタジュタ（マウントオルガ）へ。ここは地表に突き出している一枚岩の反対側、つまりウルルの兄弟。ウルルへの登山は 2019 年から禁止されたが、ここはその上を歩くことができる。大地の息吹を感じながらその迫力に圧倒されていた。間近に見る太古からの地層の重なり、崩れている大きな岩々、渓谷の奥からは恵みの水が川になって流れているのに感動したのを覚えている。個人的に大好きなスポット。



ゴールドコーストのスカイポイント展望台で、ルームメイトと。まだ出会ってすぐの頃。

2024 年度（春学期）
Griffith University（オーストラリア）

早起きして、朝日を眺めながらピクニック。オーストラリアのビーチカルチャーが恋しい。



2024 年度（春学期）
Griffith University（オーストラリア）



世界遺産ブルーマウンテン。旅でオーストラリアをより深く知れた。